パロル

vol. 10

PAROLE
Sukimaki Newspaper
PAROLE Vol.10
September 1, 2025
https://sukimaki.com
@sukikara_makiko

文学フリマ大阪 13

ブース番号 お - 5「SUKIMAKI ANIMATION」

2025. 9/14 Sun.

Open: 12:00 - 17:00 (最終入場 16:55)

会場： インテックス大阪２号館

入場無料

あしもとにゆらぐ vol.7

「若手作家による希少植物作品展」に出展します。

2025. 10/18 Sat. – 26 Sun. (会期中無休)

Open: 10:00 - 16:00

会場： 京都府立植物園 植物園会館 2F 多目的室

本展観覧は無料ですが別途入園料が必要となります。

植物園入園料： 一般 ¥500　65 歳以上 ¥250　高校生 ¥250 (中学生以下無料)

* 障害者手帳などをお持ちの方は無料 (証明できるものをご提示ください)

SUKIMAKI
ANIMATION

SUKIMAKI ANIMATION Online Store

スキマキアニメーション・オンラインショップでは、アニメーション作品や ZINE などオリジナル商品を販売しています。https://sukimaki.stores.jp

*『LUNATIC PLAN(e)T』制作日記

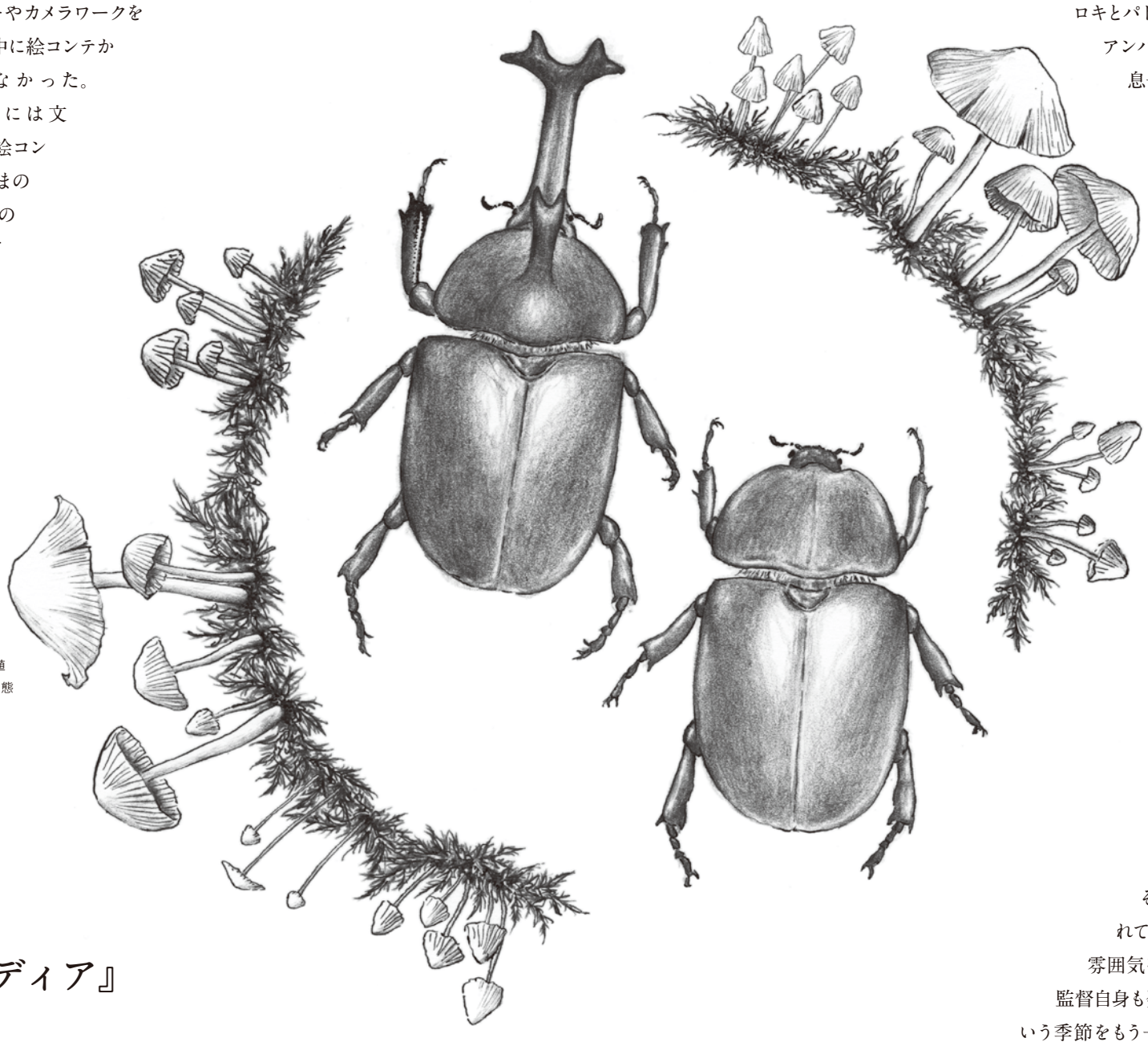
無意識に感じる要素

マルチプレーン撮影台という超アナログ技法で制作していると「なぜこんな手のかかる方法で制作しているの？」とよく聞かれる。「この撮影方法では塵や埃や光の揺らぎといった偶然映り込む要素があり、それがデジタルにはない空気感を生むから」と答えていた。単にその空気感が好きだからという以外にはっきりとした理由を言語化できずにいたし今もできていない。私たちは現実世界で何かを見るときに、たくさんの塵や埃や光の揺らぎを一緒に見ている。映画を見るときにも、これらは鑑賞者にとっては不確かな存在でありながらも、無意識に働きかける感触として作品を決定的なものにする。これまでこの「無意識に感じる要素」は偶然の産物として扱ってきたが、現在制作中の新作アニメーション『LUNATIC PLAN(e)T』では、意図的に取り入れコントロールすることで、これまでとは違った空気感を演出したい。

『LUNATIC PLAN(e)T』にはたくさんの動物や植物が登場するが、それらのキャラクターたちと同等の存在として「空間」を描くことを目指している。空間自体がまるでひとつの生き物として感じられるような表現。作品のことを考えて夜眠りにつくと夢の中でアイデアを拾うことがある。最近は不思議な印象の夢が多い。現実世界で見た一瞬の情景の時間やサイズが引き延ばされたような感じで、朝起きた後もイメージだけが強く残っている。夢の中で拾ったイメージを元にいくつか制作し始めた。これらのイメージを積み重ねることで表現したい空間が見えてくる気がする。

これまでは最初に絵コンテをしっかり作っていた。絵コンテ段階でストーリーやカメラワークを決めていたので、制作途中に絵コンテから脱線することは少なかった。『LUNATIC PLAN(e)T』には文章形式の脚本はあるが、絵コンテは作らない。思いつくままのイメージをスケッチするかのようにアニメーションにしていく。

（鋤柄真希子）



*『LUNATIC PLAN(e)T』：地球から月へと移り住んだ動物たちが植物にメタモルフォーズし、森を作るというSF作品です。クマ、ウサギ、ネズミ、オオカミ、フクロウなどたくさんの動物が登場します。キリンは銀杏、ゾウはセコイア、といった具合にその動物の形から連想される植物へ姿を変え、本来ならありえない生態系の森を作っていきます。

スキマキエッセイ

土を飼う

ひょんなことからカブトムシのツガイを飼うことになった。５歳の息子は毎日のように保育園の帰りにダンゴムシやバッタ、サワガニ、トカゲを捕まえてきて、「飼ってもいい？」とおねだりしてくる。「クエスチョン（メス猫12歳）がいるから」「飼うための設備がないから」と色々言い訳をしていたけど、自分は幼少期に好き勝手にいろんな生き物を飼っていたので、常々罪悪感を感じていた。そんな折、訳あって実家で両親がカブトムシを飼うことになった。数匹だったカブトムシは繁殖に成功し、２年目には実家の玄関先に飼育ケースがゴロゴロ並んでいた。誰かもらってくれる人いないかしらと漏らす母に「オスとメスを1匹ずつちょうだい」と言うと大喜びしてくれた。

8月10日に我が家にやってきたカブトムシ夫妻は息子によって“ロキ”と“パドメ”と名付けられた。ロキは時々ひっくり返っていて、パドメはエサも食べずにずっと土の中に潜っていた。小学館の『飼育と観察　身近な生き物の図鑑』を買って、息子と一緒にカブトムシの生態を勉強したところ、２匹の寿命がもうすぐ尽きることが分かった。名前をつけない方が良かったのではと思ったが後の祭りで、息子は嬉々として2匹のお世話をした。カブトムシのウンチはまあまあ大きくて、それをせっせと集めて取り除く。私は畑の良い肥やしになりそうだと思い、息子からカブトムシのウンチをもらって畑にまいた。8月14日の夕方、2匹は並んで動かなくなっていた。手のひらに乗せると2匹は驚くほど軽かった。息子が「ロキとパドメ、心臓が止まったの？」と聞いてきて、昆虫に心臓があるかどうか知らない自分にびっくりした。

ロキとパドメは昔私が飼っていたジャンガリアンハムスターが眠る公園に埋葬した。息子があまり落ち込まなかったので少し安心した。むしろパドメが卵を産んだかもしれないとワクワクしている。ロキとパドメがいなくなった飼育ケースは土だけの状態になった。我が家は今、猫と土を飼っている。

（鋤柄真希子）

散歩する無意識

松村康平映画評

『ミゼリコルディア』

(2024) アラン・ギロディ

2001年、カンヌ映画祭に出品された中編作品『Ce vieux rêve qui bouge』（「動き出すかつての夢」の意）がゴダールにその年のカンヌ最高作だと評されてから約四半世紀、フランスでギロディ史上最高のヒット作となった『ミゼリコルディア』。

フランスの片田舎、恩師であるパン職人の葬儀に参列するために帰郷するかつての住人ジェレミー、葬儀が終わっても失業中のジェレミーは無目的に滞在を引き延ばす。しかしこの「まれびと」のパンセクシュアルな振る舞いによって、閉鎖的な集落の人々の人間模様はざわつき掻き乱され、或る殺人事件が起こるというノアールタッチの作品。
プロットとしては擦りたおされた火曜サスペンスのような内容だが、主人公ジェレミーがおそらくパンセクシュアルである（あるいはバイセクシュアルなのかホモセクシュアルなのか最後まで曖昧なままである）ことが、ありがちなストーリーに差異を与えている。殺人の罪を起こしてしまったジェレミーを救う神父（ジェレミーに対してジェレミーの立場で告解を行うというアクロバティックな方法で共犯関係となっていく）、彼もまたホモセクシュアルであり、二人が肉欲を抑制するためであるかのように幾度となく勤しむきのこ狩りは言わずもがなファルスのメタファーとして露骨なまでに繰り返し行われる。

そして本作の白眉である近年量産されているLGBTQ+映画と一線を画す雰囲気を醸し出している決定的な要因は、監督自身も発言しているように「片田舎の秋という季節をもう一つの主人公として描きたかった」というスタイルである。その主人公たる秋の風景は盛りを過ぎた人物たちの人生の黄昏の暗喩であると同時に、村の人々を包み込む柔らかで物憂げな舞台空間でもある。このスタイルを実現するにあたってギロディは、ミキシングからのアプローチで挑んだのではないだろうか。クレジットが表示される冒頭とエンドロールのみに薄く乗せられる音楽、その旋律さえも環境音とミキシングされて後退している。それは事実、音楽が鳴り止んで環境音のみになった瞬間に音圧が上がるような錯覚を引き起こす。日常に溢れているはずの鳥の鳴き声や風が通り抜ける木々のざわめきにこそ見るべき音や聴くべき映像があるのだと言わんばかりにリュック・フェラーリを彷彿とさせるミュージック・コンクレートにも似た手捌き。音に付随するように映像が遅れて現前する感覚。

フランス語「ミゼリコルディア」は日本語に翻訳すると「慈悲」を意味する。パンセクシュアルであろう主人公にとって慈悲はどこから、そして何から齎されるのか。本作で描かれる慈悲は宗教的なドグマを超えた場所で齎される。慈悲とは神から人へ与えられるものではなく、人と人の間に漂う愛のような確かな何かである。それは刹那的瞬間にのみ感じることができる永遠性に似ている。暮れていく世界を秋が押し留める恩寵の中で、ジェレミーは或る者の傍でひと時の休息を得るだろう。

（松村康平）